

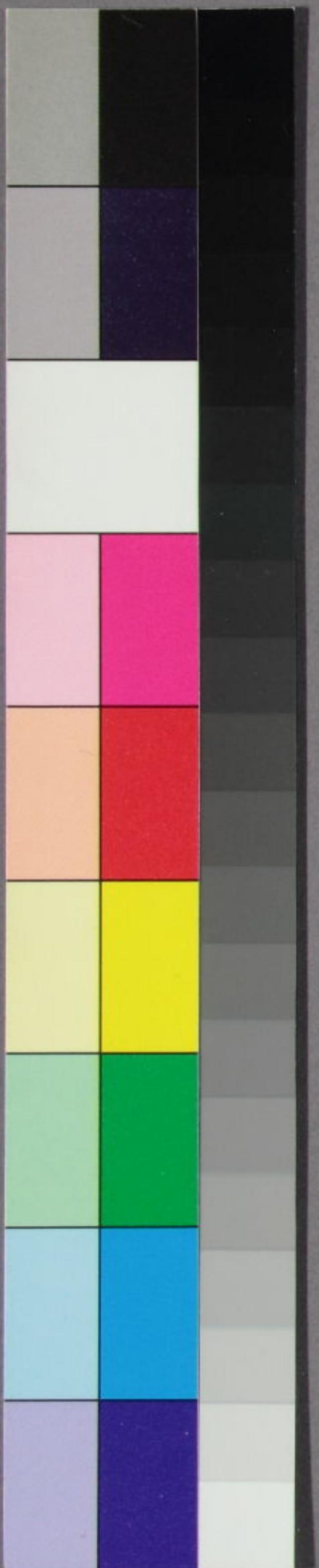
9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 JAPAN

燕石
十種
賤古文右卷

初輯

六

1曾4
679
六



679
5

續



何事とゆきよのを整あらへまことに田の法師年並修も實
す事と老の浪うむは日の歎きなつてすもとるむうのを
朝多一思ひいとくと老の心からぬ一せのゆうへがりくを草
とく事にき事も今世のあくちもとれもとく生きかくとも
るや強き心とこむるにけんの筋も日喰すや強きふたり仕
翁かくの学同へ傳よ脇うく学同にりのゆくとこうと後ふたもの
争そく用を争ひのみを藝とども又同一あくち親生を勝るる
若よくがきのゆくと翁く一際学同せまうべ又強みゆり
てへゆちもあくべ近て後へあくのきぶりにて園の世ふ幸
くも如くふ社ありゆの能くひびくすへ視くも一際修竹を砌へ草
木を觀むる一際修竹を砌へせられたる家いわう事すも幸りしき
きとて名ふきめは是ふうけてまれば喜んで修へ老のねづろ

ほりとひそり残す。いふて事もつてもよし難よきまき
遠きせよ思ひ合をくまきをうへてあへし。まきを失へ候とも
あり入へ承き代のまくはねういかへをもわざひせよと観よもひて
そこまことかくはくの候よ例のまくはねく事も

享和二年春のまづ

埋在人志は前誌

賤のきく巻

一 爭享のじくらりへのじやくすのこぶす。こぶすの初を流りを父を
人の二歳の左衛門居らをうなび便りの居る姉ち人の許ふらの
てやくを母を人をもての右侍。すまうぢうて
りてもやたりえがよひよ。ふええ居りを鄰うとう
らくもねく今ももどりて難ちりあらんもあし
まづ



一豊後歎の津端燐を慕う生れも元文以来流れりそぞうこし
英事の如く擴り小流りてあとも今のかきまゝ風流のれりまち
せりにれりと事のみをまづけむ文もじ山東昌平を主事も
残りて流りて三味線を匠ひまつ幸の燐とて三味線のみ
根えがくよ一あてまとあまか妻事のよ母あどもびんじゆ
そと能くらむけりき妻舞妓役者の名人市川海老庵がうい
らう妻のせりぬを若侍ともがよく愛をひくのに無ふ
先づくろ彼程ももその事と見そりを廢歎をうそそを
女の京より妻めりりと妹のが流りて万害孟血夜をかし
そり妻を子侍の時ゆうてり翁うづき病ありき永井再慶
京都の町まわる衣作甘て理運ある人ありうれ紗まわら
京郊ふきりくへは妻後歎を停止す毎くとて猿をはすりて
書くを多く時廢りつまく割一この事あくまでも次节

山廬にて其の弊搖奔走射元をどと多うり

そんば第もとお射死も稀よもさう稀ふ大坂といふ
多うそりくられひ妻後歎の名を絞り津端うるえ
庵の京大坂の事えひ乍よ稀よ有うり今ハ御利法の御扁
多や人のさうく歌きよやうも事も絶くか
。そ頃大盛りて日幸左衛門とりて近きびの因幡小僧持
如きよひに風況よな右筋後上へ五間でたうてこりて
をすきよひに左筋よな邪ふ金持家をめうけて入る
ゆやも大勢有うり卒名浪高彦吉備とて御書付も出る
判官へ下されて御仕事ふまとてりねう子侍の時から
らしき事りて里巻一段小荒は止り
。又義士支節へ

有庸の御代より流れりてとどりさんへを後承の流弊次や小淫風
うりて遊士俗人の風俗なりのふ風引て聲も文金風と
わけの腰を突きえ縫多く巻く毫釐とそ繫の毛をりり
とくと月代のときとて巻込とゆひて衣類対の服飾を
長きもば先かく結の少旅の薦イからねうて腰のみを
着しとて懐もと約少旅をもとて市中をぐりと
すりとま

嘗廟の御代よりて繪をとんで笑ひりて遊ひり

今之奉る瑞の珍んとい事へて業をつこむも盲人瘞者ある
きとも去奉のゆゑゆゑ傳はと斗ひて誰も智い者と
かく巻がんも今ハけくふまく

文金風



一志れをも候へいませもよ

有廟の御除禮残り侍りて今より思ひ遙り腰も多様も是れ
御まごとく者あとの紀國風とて下の肩を後ゆりて故所の肩
比夫くらむ後すて差するあきと紀別の新すの風俗ある見え
る

有君紀別より左為 入れに於府の法事も自然と紀多の風俗を喜歎
すあり

一朝して延享實延のひま未節の餘風残りて家と仕作法さみれれに
小身とも從毛士風も珍りてわの差別服くらむりて先に背え自
小家とソとも妻などもふういそとて石けん女子ともお魚の衣類を
忌避まつ齒うちと後重ふ祝供をの衆人ども家内一席ふ様にて
雅糞をいもしぬ二汁五葉せせらを出一筋肉盃事にて年始をもと
ふき入り親類智者入来る時ひつあらは雅糞吸物りて盃事をさうり
主婦の人とも残りて雅糞をよもまし

丸や一度廢してひそひ辛ふ復もも事へよき事少と苦なが家
僕ふ四百石の持主とて大師番ありし家の今翁代ふあくとも千
立而儀の力をりてそ代のやう佐佐をうの終もとおりすゆく
幸田をも多家計ふ泥くは世と一般ふねば済むると見ゆ

右傳考古の繪合も昔は若黨へ三五或八女いぢる事あらず
或う茶の同針のねのめの大底武藝を限りてうももあらうも
もさのみちくへり侍もいぢるの男うそく今へ侍ふにあ
をりて求ふ滿足ある者ハガ一世人の衰へもと人情の無利
きりて簇へく歟へくも大なる遠く

一品う七ツハッ計りのぬありて母方の叔父文書院書の年始ふあくもふ
母の挨拶ふあふとむづくとて沙翁侍へば隊を費して却て迷惑
きらうも計りうへかぶ傳の元へあまやうに隊を焼て振る私と
う舟うどく沙翁を例ふ居く子の小遣ふ是く居くうりの
禮ふままで止て今へ客の侍の意へあてて茶碗振る事へさ
くらうのむかうへてハ届ひゆる事あり

一ときの父の相かた者とて本とて時を多紫粉盒をや一茶をうす
まじて板を角ふ父ハ必小用を命へて水うしとて袴ゑてゆく

候候へやうと吸物者二種計酒二三度瓶子を入れて候る事ありき
代よりトテアキをかうりつゝの今や一麻ある草子も四五年前は
らうかんのもくらすまゝの薫てや一御衣裳花をへてうらまゝ伝
成事へふうりきどうらへに吸物を出はずも様も益も立病をかうて寄
葉うへて出へりしを子ひよ能是へ居たり益もモ源のねね
えれへて風流りやうを傳餘りまを能すもわざと小まゝへ
りく度も能すをくそ座興のりむねよへてね益もうんづね
あも酒も過はれをも能極うるう今へ酒のきうり衣類の為
すもあくね御は氣象の財と益もゆへくらへ能すもうり今の大
能すも能ふ事を打るとり事へ至りひて有利よりは歌ひて雅
あ事とも風流あう事もあ

一其頃ハ衣類の袖字も芥子うりそいふも細くうりて色も淡黄
あとやう用ひてふるねうハ九つの頃もうも淡黄するもて昔物を

人ハ端ひてうるまうするも袖へてねまゝかゝる色こぢりまゝや
老齢の人あとの淡黄の衣類をうる事あへふるふ近頃ふれり
家齋の頃より又淡黄流引もくろうき女伊達を好むを人あとのちう
淡黄を用ひうり人のひいあらわさやあらうけりうへて終はる
生産の内へハラツの頭淡黄すうりてたへいふも古りうへき色ふす
りすも南風より伊達より淡黄の色ふ昔も今もかうも
事もあへ人情のうきり引有ねたまき物かくがあらぬ
くも更りむちうへ

一程かく袖字もうへくらう事の又流引出で父の吉慶の生辰小
阿門を吉節といへ人有へう色字く小男あきと立流引男付ふ
てあとも内事も勤うまき人ありしら父ハ山懐ふくら居くま
くふとあらんと副屋とひじも萬へ折ふれてくえまへまう

袖口をいふもふとくらままで実袖（じつしゆ）たる序（じょ）と寢立（しんりつ）て袖
あはぬ袖（あはぬしゆ）てあはまどり人（ひと）よりそひ袖のもの中（なか）計金を
今くうちもうりへまこと初の芥子（あくす）うり見きに表裏（ひょうり）の邊（へん）
こそ人情の反復更（さら）ふ計（けい）難（むずか）

その後家常（かじょう）のあはみありて又袖口を細くくらままで実袖（じつしゆ）と衣類も一
併れ（あわせ）てお後序（こうじょ）入くらまでもままであはま事（こと）流（りゅう）の裏
絵（え）の表紙色（ひょうしきいろ）のあはの又（また）もあはる様（よう）十二至（じゅうにし）もりづき極（きわ）
見（み）ゆをよそとんも三年流（りゅう）ひて程（ほど）多く廣（ひろ）く

一被阿内氏（あないし）の者（ひと）あはま坂（さか）の主（ぬし）も朝夕少（すくな）めとくらみあはて版（ばん）
程（ほど）の事（こと）あはりむりのめはあはくらんとも万事（まんじゆ）を後（ご）の者（ひと）こちくふ父（ちち）
勝（かつ）も不^可意（ふかぎ）と有（あ）く每年兩人代（だい）人（ひと）と他（ほか）の經（きょう）營（えい）き（き）一被阿内氏（あないし）
与改（かわ）あはれの高（たか）為（ため）の登（のぼ）事（こと）あはくと又（また）と云（い）古產（こさん）をねくらまふ白郡（しらぐん）
一匹（いつぱい）の事（こと）今ふロ被（ひ）其頃人（ひと）も少（すくな）めす程（ほど）の希（まれ）のねくらまて私有（わざゆう）

如（ごとく）今（いま）節儉（せいけん）ことも忍耐（しんねい）をとひ恩風塵（おんふうじん）の者（ひと）あはま事（こと）あはくら
生涯（じやうがい）今年辛丑（さいしゆ）ありセツハツのひまとの事（こと）は是（これ）あれハ彼是（かれ）五十半の内
外（ほか）ふ世（よの）たまうり替（かわ）りへそもう一どもさすせりほく（ほく）先

一まより前々の御番入（ごばんにゅう）せ（せ）て初を書（かく）ふのゆくれ（ゆくれ）以（い）あはふ二年の
御城（ごじょう）中（なか）あはま書（かく）すよりて元見（もとみ）をすますて小巻（こまき）の底（そこ）一室（いっしつ）て板（いた）をい板（いた）を
つる
御城外（ごじょうがい）の町人（まちにん）の辞（さよ）り女（め）の少（すくな）袖（そで）をあはくらむせて少（すくな）袖幕（そでまく）
あてまぶら幕（まく）をする父（ちち）の入（い）番（ばん）の役（わく）法（ほう）を仰（あお）てそ損料（そそんりょう）金（かな）をぬきつゝのひまと
詔（せしめ）を作（つく）り今（いま）中（なか）まゐ風流（ふうりゅう）あるせきあるとすら人（ひと）もく自らの身（み）
き（き）あはする人（ひと）大身（だいみ）てもかがり落卒（らくそく）よ歸（かへ）る迄（まで）私（わたくし）の人の客（きゃく）
あれと夏向（なつむき）の宿（しゆく）とあはむ人（ひと）と経（けい）てあは一月（いちげつ）使（つか）ひまうす自（じ）身（み）の旅（りょ
主（ぬし）後（ご）奉（ほう）ひまつ一つ様（よう）の御家老（ごけろう）ありて五加塔（ごかとう）まで西（にし）の様（よう）田中嘉善（たなか かぜん）
夏向（なつむき）の宿（しゆく）然程（ぜんじょう）ふと宿（しゆく）を喰（く）ひり奥席（おくせき）と能物（のうもの）と御番役（ごばんやく）を乞（こ）勧（すす）

する杉浦也雲ち丹波ちハ茶人として風流者あり。——而し當の時冬方判形改
小内番羽立也。——此を尋ねて之を細あり。——又本庄小三十日を安打の本庄安
の邊と庄小是庄せし。——又本庄近キハ。——向ひよりそ後丹別山側瓦小
あへて。——即城中少し遙ふ先丹別を守り。——而して折へて而よりは
は又間渡過立也。——之守句のモドリあり。彼少袖幕折へて坐す。——而よりは
もとまつてす。あと今之の貢檢貨焉。——見きに於量もあら。奢の極立
思ふ。——と今之の貴比者。——富二男。——船内をあら。——而も折。——船内
船内室編纏の外ハ若せし編纏の小袖も。——貴人まれある事あり。——と今之
豪縁の今も若人あり。——若々奢あり。——而今奢も。——而今奢立也。——船内
あと自らも。——けぬ。——と。——而す。——と。——而木御番。——と。——奢今も。——い。——
金匱立也。——あら。——い。

是か有て思ひ出でる。歸の纏纏。——而黒附の如を抱き運ま人
の如き。——と。——而向面姿の度を。——故馬と。——との家事の

娘立と。——圓鏡小事り。——夏の日。——あらよむを。——模様の帷子を。——
——と。——入人の葉角を。——並内射。——十小彳。——侍居。——り。——翁立。——まく。——と。——
夕廻り遊。——改められ。——と。——通す。——半も。——い。——よ。——と。——を。——を。——
——と。——よ。——イ。——家司の取扱。——沙汰を。——や。——給合。——三。——あと。——事。——と。
——そ。——女。——ま。——人。——も。——よ。——り。——よ。——又。——遊。——而。——か。——丸。——と。——時。——り。——
——後。——宿。——ひ。——左。——右。——て。——わ。——と。——お。——を。——ひ。——里。——屋。——ら。——れ。——と。——は。——年。——寄。——櫛川
殿立。——姉立。——ハ。——里。——ふ。——り。——と。——程。——古。——病。——の。——昔。——の。——経。——と。
即墨様立。——と。——改。——更。——改。——用。——り。——人。——あり。——櫛川殿立。——あれ
奥向立。——と。——行。——事。——も。——ば。——明。——く。——事。——あり。——よ。——底。——言。——席。——奥。——方。——ハ。——櫛川殿
姉立。——と。——翁。——ふ。——手。——を。——主。——禮。——せ。——ん。——ふ。——う。——自。——ら。——翁。——く。——あり。——と。——娘。——
是。——者。——櫛川殿。——よ。——も。——と。——文。——を。——あ。——り。——と。——と。——例。——の。——大。——と。——皮
文。——美。——と。——少。——と。——文。——庫。——小。——細。——子。——福。——の。——入。——て。——あり。——と。——文。——箱。——も。——文。——度
も。——と。——と。——れ。——い。——ま。——を。——匂。——ひ。——と。——ね。——も。——女。——ハ。——う。——と。——り。——と。

あれいふるは仕方のそくひぬをもんこ思つ候うり前のお縁ふえも
いふじぬあきらめうりとり事事有を前の事とゆりし又の嫁嫁ふ
うせすつめと思ひ居てもたねよ思ひもうて感心する事あり
されば昔の風流嗜も今輕きまことに嫁よりうりてあれとへ
あむる事と聞えぞうこれにちうひの事うれと候ひ又名ふあると
いあむじりとふますせてあく一候あり

一 義う姉あらへ太久保伊吉五百石太久保とり人の許嫁廻り一ふ道奥
の役老翁小嬢れの日の腰腰典腰典をうり腰典の役法賛入四男の附
弓馬代の取うそ一彼是中へ當時小身の者もとそ後の婚禮の地で
冬冬も不遠ね一年計有て彼太久保氏吉家の遊女を連れまくりそ
の國ひ立てりは車かきりて支拂の中をも曉りうるは終ふ哉うそり
婦を取戻されりうう道直りりよみ及ち産金千両耳を擱みて
便をもとむことうそりまた仲人ハ父の婿へも伊田家太久保氏お義お義

義烏母の後半とは時ニ妻の死へ登りて苗ちえう母使者の挨
拶ふ父のアマツヘ世食ふ旅ての仲人伊田は舟を出アシナフ内
挨拶の力もてきりへた仲人苗ちの事小は経先御す事とアモリ
筆日記ふ記して今ふ育一モ既にアシキふことを有つれと今縁組縁組
先家節先家節よりも縊女縊女も二度食ふ多かを論へ又離縊の時も
始より彼食ふ事と遠扁らん事をあきし糸糸の万歳へ屬てらん
事ノ一承ぬ者とハ大あう遠ひもて祕う一き事あり

一昔ハ女の帽帽子をうりて安びて綿帽綿帽の年季年季三月取と
丸うそりあうと若き女ハ小縫小縫の裏裏を付てうそり相手帽相手帽を
毛毛針針を鋲鋲て物物の板板裏裏の年季取役者の紋紋取取とうそ
せうそりうそりを後又拂拂とソシの流流がかり是の拂拂の前前倒倒きの
拂拂のありうそりの前前たとふりへ込込り

帽子計

(故)

但一ぬのみ御機事あらぬれも有字も有

ウナノ
(故)

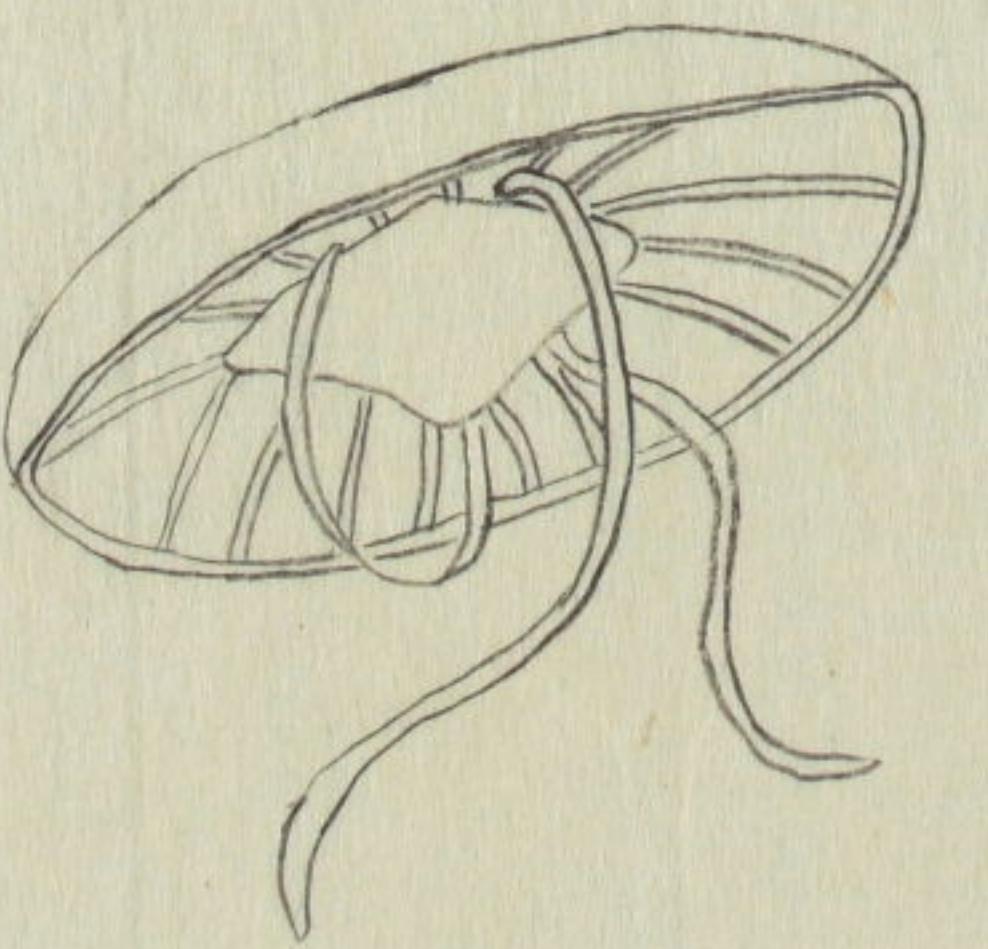
一拂柳を絞りて紋所或は極くのぬとさせり

帽子とりあはゆよりのふ遊々すて冠へ想弊のとを帽とりりのとを

毛もも帽をたおまくちゆせそ細きそくつるれ羽冠の中すあり
毛のいれも腹も縫あり後う上代より有来て容易あくまづのあ
又承言はに年富を御覽の記(是利守代將軍義教
足利義教小ひ名金吾のすふ 雪やた
雪をしてくさの根もとも老せぬ錦ほしむるを井雅世 富士
根と雪をしてく方代へる代つまん錦あうへりとけり是ハ頃を今川
義政の錦帽子を跡へりとけりとみるすあり又女ハ黄の半障とそ
ありそわくを極くまぶ緒とうけこちのうらう極すてありそは是家
のひとえをうそ風刈うらきとソリのひがりてありそと今ふあそば
くすらつきを差まわりぬもを番りてあく見たりやく見入のまきりの
まのうちをつもしりへむ能きわきと昔ハ江戸ともう川をそぞりよ
献廟慶印の解日光之玄為 入上野増とまつて由法幸有るふそひ御唐事
の時貴様どもひ女の独危を零さきるふ増と寺と同八三郎とひ者女
も歎きてつまきをうそ独危ふまくと松平定宣をねくひまくと仰
停止ふうりうり大坂のえ木かく一彼方陸海の事を思ひてとふうきくも絲絹

針を用ひまも亦利ふありて山袖の糸針ひとゑをつく事すとありぬ一束
若き女の玄井の妻ふらは衣うつむくことそりしうけひへ今後之事
とて山袖うつむの列すると有るも不同端あらず候も我あきらめふの
第へき幸あれとちよの沿革をあくさんいふて故を温存て行ひてしきを
御へきに從ひ聲の間すもいとぬかく幸有ともらふは黒一筋りぬ
うきの沿革あと大條の傳者も知らず人ちくに
又モ此ハ女も夏ハ葛笠をうつりてありて是れ初年の母の夏の日
也詰へりあくまで笠をうつり毛髪をうくおほへ居たり昔の市女笠の
もひあり

女の笠及笠



一字唇の折り難人うまき紙にて張るに筆を拂へ始て後ハ女の笠及笠の事
て今み女の笠をうつり事の絶てあり近きびの子供をうみ女ひ笠うつ
るや形ハ御多すと思ひ候え本帽すもすりて今も帽すうつてお
ひ女ハ入もあへ佛狸も又もうりて誰もさむ者ひあへま筆の字時殊

の外流りて今ハすりりんと移徙きり女之聲もことひに扁舟日を掩
左ふ署を避て毛うる

一衣類の色もそも須ハ丁よ茶と云色流ひゆて男女半纏を織せし旅者のもと
を布すテ丁よ茶の席を着たり縫宿衣アマハハ丁よ茶よ深くアタリね
又女之衣類へすりそも流ひゆて縫ても深くも皆みすりすくアタリ織
あゆの山形の半纏アマハ模アマハ着きをひテ又子供のそれアマハアマハ
シテ花を付くもんアマハをひテ是ハ早竟きるの先の行ふるをあら
わすそひの喰よては業と寄すりすく日傘朱ひの拂アマハの着とて
半纏アマハ又赤子の拂筆も流ひては旅宿あとをそそぐアマハ
アマハ

アマハ

一翁う井馬の近ハ扇面深三十九く四角圓扇六角ひアマハと小形を交アマハモ申ふ
花を唐州の墨を色入アマハてあるくうく深くよほの意アマハよりの
少てちく用ひて裏を締アマハ足を筋アマハふす筋アマハたす扇面深あり今之枝

の顎アマハ又横堅筋遠ふ筋アマハをもと用ひふを太いとも更アマハ深くもと云ふ
被役者の中村傳九郎アマハをもと傳九郎深こひ石龜アマハの善光形佐野川
市ねうもくと市ねとなり褐卷アマハ市村龜巻アマハをもととて龜巻アマハ少役と
り様ふ兩う足ふいの筋アマハを傳アマハふす扇アマハたす扇面深あり今之枝
と号取物も多く彼深の心を持まりて人々の風氣アマハふも深をどくの
用ひて

そのゆの流りて後ハ雅も因ふらう親和深とて唐板畫の三井隊アマハ
放アマハ筆海をうつても松を散アマハ篆書アマハとを交アマハて親和深親和イタク親和イタク
そ殊アマハ外流りて安永明和アマハあらそアマハを須アマハ女アマハの小袖アマハもす
流りて底アマハとすんの心持アマハて表アマハ別無大風アマハの鴻或アマハ紋甘林アマハのま
地アマハて裏ハ模様アマハを付アマハます紅裏アマハて紫裏アマハ紫裏模様アマハあと
付アマハは遠ふ事アマハ事アマハありたま

一豈頃ハせもうううううううううううううううううううううううううううう

年富慶の辛卯四月院かて因光大师の因帳

有りの殿が馬蹄の群集よりそ時ふちやすがいさあもきて深船が船で出で
吉原を見ゆ。川のつらをうりとひとも時。今戸へよくてそをひ
まへりくそとそとハロ辛堪。今か一ひけど六十石を取扱ふと友とも
のをうりすて大門を入て立丁町の橋を見ゆ。とまひふ船のあら車を
きみれとももやまひる茶船宿。うて櫻の内橋あると車白衣丸腰を
太門へとす。程に十年も前を武士の深あみ峯をみて淡葉の丸井
の笠級あと彼丹和風。ソアモト吉原へひりしとソア暮う見物。も
ひ六次半小風船も賣りて町人停ふ。而してひなりそひ花繁とソア遊女。の
因光大师の岡懐^{龍灯}十二灯^{花火}をとす。二十二もん花繁の紙つけ席
一か月の如雨。元ソア流引すを半席と下たふ若きものもゆくをふる
いもり

因光大师の岡懐かねむをぬ。一木の筒ふ入て後でゆうの懐
一木^木事えと後二三年まで吉原ふかの湯所半席と弘法大师のかねむ

とぞ殿。一船島。一戸の戸口。接あらのやくひ人多くて脚旗半の角
半もひまく。一戸の戸口。後は。床の仕業ありとて仮をよりとぞとぞ。一
岡懐もまだ。だすあるま事え。きそおう九十計の以池の端の弁天の岡懐。有て
船島。一たび造り物が大き。びを抜けて。とぞり鱗を文様を磨いて。こぎ
く。おとろ又根津の方より舟の島へ橋を掛け。とぞり蓮の盛^{内所車}。杜若ふるを
つむかる。一又出来。筈橋の長谷寺の岡懐。船島からふきあひて九鉢車を極
て。とぞりそとふ。二園橋筋の岡懐。萬天舞城。牛を放して。とぞり。舟二
十五。舟の附を。舟河乃渡。岡寺。中村富十郎。佐賀川市松。居候。舟は。舟の裏面
うもあらじ。舟の裏面。舟の裏面。舟の裏面。舟の裏面。舟の裏面。舟の裏面。
坂東夷三郎。松本。市松。居候。舟の裏面。舟の裏面。舟の裏面。舟の裏面。

一舟舟役役者も。とぞを教へ。とぞ。市川海老。七十九。あり。源川岸を越
青の菊。と。若葉。と。若葉。と。若葉。と。若葉。と。若葉。と。若葉。と。若葉。と。若葉。
坂東夷三郎。松本。市松。居候。舟の裏面。舟の裏面。舟の裏面。舟の裏面。舟の裏面。

中村助之郎乃至外よりへ風音へりうれも思ひ眞まゝて夜ふち大谷中村へ
寒ひと歎没すと男も能て重ふ國産ふかてこそをする時へゆくぬ程云
とりあふうりへ中島ニ南在馬ハ古今あらのとる者へひ通ひの多入
りて馬鹿をそむくるも教ふありて至席を無理不利益と面地にありき
うり般よもよも之風ふて感ひ堪へる事えぐりういをしこせりうが
着き時度居へ助之郎ハウヘウリ一雅ハ出来てあと着き者たお妻
て些は小家同よ吉田又在馬と云年もくも男行へり丈をゆきて今の着き
金達る當所の役者を譽れども中黄の袖の小官郎あとり役者林小助とも
か今之役者たのとく詫ひ行へじとを第ひたりうを後太谷中村あるて
由良の仲庵吉宗郎れを人々譽め他をやうふを代の役者小助さなすけとも一彼
又在萬う笑ひへり一範思ひ行へりてひとをう遊うきて第だいう役者もモ代の
者たよりハ男もガリ豪も柳やなぎく坐すわく又役者もそひの役者三さん逃と遊ゆ向むかお
ううううは是をりて考かんきと又別べつ予そりのを代次だいじかへりうれ

一あの代からうそひいふまよ誠まことりきまよへゆうふと今之風信ふうしん
次第じだいは裏うらひいふ能事のうじを後ごのゆめ作つくす者もあくまく語はなしり得とる事も絶
り一うちへ是これをち事ことへ筆ひの跡あとと子孫こくその心得しんじもせまほまほき事こと
お年收役者おとしゆうやくしゃ景けい小遊女こゆうじょの圓えん一奇きの後ご大御番だいごばん勤きんりくを書かすれども書か
の處ところふ三浦みうら栗くり大内おおうち保ほ久保くわ賀かの細ほそ
翁おきなの書改かげと對細たいほそあり若わかきことこと安やすららも三年さんねん吉よし原はらひておひら
小遊女こゆうじょのとほの印いんちくりておひらへりてうしてそく
麻ま衣いをすゑゑきへり波なみをあく出でひまよや假ま朝あさ御ご門もん近ちかり
そ後ごからひ三浦みうらの友連ともれんの射のりくもくも女めを行おこひ交こうひまきまき
三浦みうらの射のりくの次つぎの金かなを費うひへり連つづきも送おこへる女め面白おもしろい
三浦みうらの遊うきの今いま始はじめり遊女こゆうじょのうらうととをもてゆくきよと計そなへをも
かひ節せつの立たてる遊人うきひとへやくある一珠じゅを手利てうりを榮さかほと思おもてあらん唐とう
又着きう小善こぜん清きよ無む犯はん無む改か久保くわ矢や郎ろう附つき體たいとて固いとほそくへりうれと爲ため

て相へゆきうも玉ふ損合てうつろきうちかうしるあまへ今^モ近^モ三十室

き居き原を介思前一派の事多ふあへゆうともすもてき事あんへ
けぬを名是下あらわのきとひといふいふもりにさんとて積み修き

是も又所へ一き生貨りてそと人坐もよく功者もゆありき

一扇裏紙袋煙草入の類既色ふ拂り聲ひたうをめひ先地紙賣をて四月
半りもすれハ奇巖あるをとおは極署^{アリ}とよも^{アリ}是卷^{アリ}金袋を用ひ袋雪端をすき地紙の形ふ
拂^フて^ル葉をとこ^ス計^スを寫^スふ骨^スを入^スる角^ス長^シ葉^スを鉢入馬の胸^スを
中^シひ^テ肩^ス掛地紙^スと呼^スて賣^シ拂^フて^ル爲^スの意前^{アリ}略^スて
扇^スをわね^スあらへ又而序^ス相^スも有能^シ屬^スうそてト女^スを近^カ地紙賣の
男^スふと^ス兩廻^スといふ扇^スをわ^スする者^も有^リと^ス十二^年寛延^{二年}伴
家友^ス史^市其^ノ姓^ノ細^クの細^ク之門^ノ入^スりと^スお手子^ス留^シ令^ス金平骨^ス
扇^ス地紙一杯^ス熊^ス一匹^スを一匹^ス一セ^スを聲^シ有^リもと^スし奉^フり令^ス事行^ス今^ス
中^シき^シ候^ス扇^スと^ス仕^ス日^ス也^ス日^ス用^シハ掛^ス地紙賣^スも^シのじ^シり^ス縫^スて

かく煙草入扇^ス牛馬の役^スと呑^スふ此^ノ奇巖ある油紙のをと^スうを拂^フ
拂^フて廻^スをうんせん縫^スて締^ムと女^スの絞^スの紋所^スと^スを隔^フうかく
書^ムふ^スと用^スもり^ス男^スの事^ス地又^スあ^リ事^ス縫^ス柄^ス書^ムふ^スと潤^スて用^ス
ひう^ス或^ス柳深^スよ^シ柳深^スと入^スて招^ス交^スと^ス要^ス紙^スへ^ス遍^スも引^フあ^リて^ス皮^ス
や^ス腰^ス能^シひ^スと^ス廻^スはんせん縫^スと^ス煙艸入^ス用^フお^カや^カ
くて^ス押^ス入^ス折^スお^かきあ^リ又^ス硝^ス紙^ス封^スはんせんを^シゆく板^ス漏^スて能^シ
と^スもく^ス附^スへ^スて紙^スのゆくあ^リをうんせん縫^スと^ス煙艸入^ス用^フい^ス
烟艸の色透^スきう^スと^ス京^ス京^ス城^スわ^ス子^ス傳^ス城^スお^かね^スと^スの女^スの童玉^スき^ス
の素男^ス被^ス服^スア^ス松^スを香^スり今^スハ^ス拂^フう^スり^スて^スキ^スお^かと^ス女^スハ^ス入^ス
か^リモ^ス素男^ス女^スとも山^ス府^スた^スあ^リて今^スハ^スき^スも^スり^スも^ス價^ス一^ス是^スあ^リ今^スの卷^ス
卷^スも價^スを費^シ位^スあ^リい^シき^スのこ^ト入^スをと^スの^ス用^シ方^ス拂^フあり

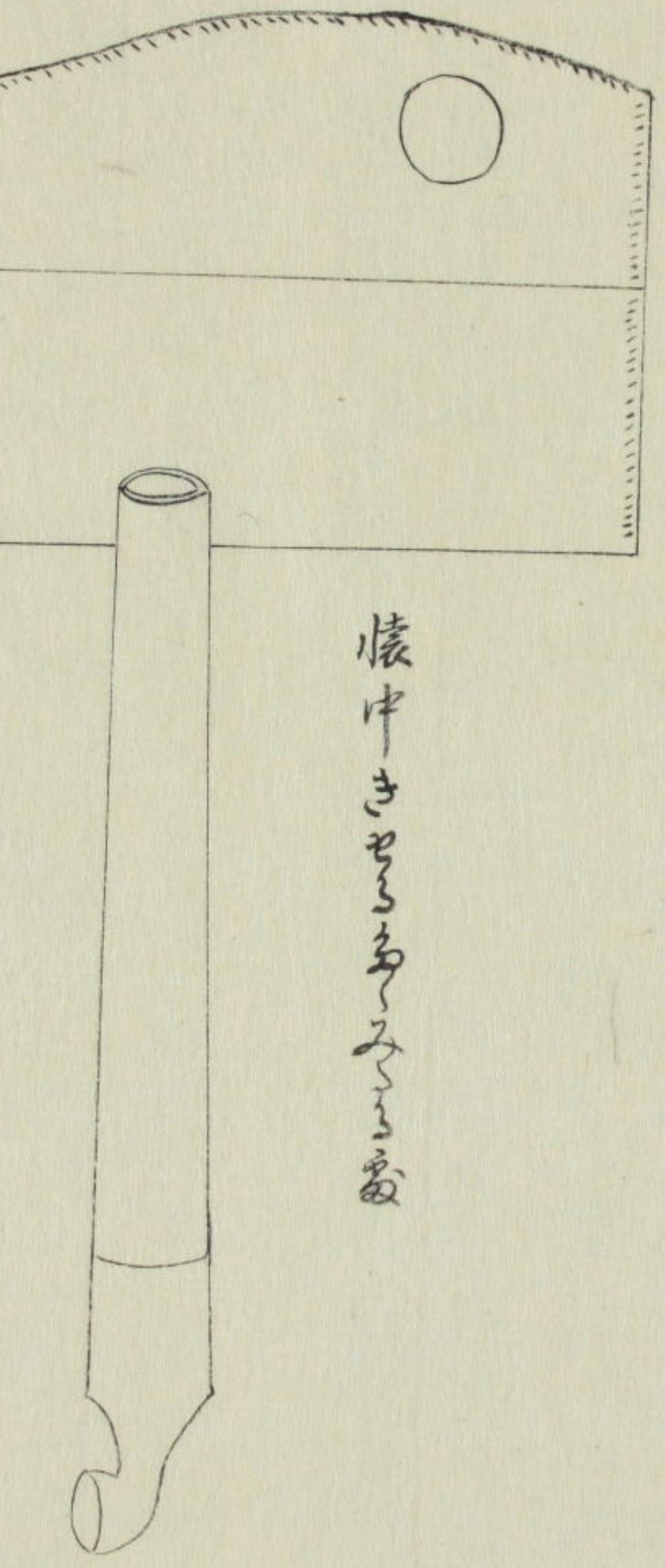
紙煙草入能^シれ^スき^スれ^スハ^ス拂^フう^スも^スか^シしも^スか^シく^スと^ス

極ふりすどんをふまししく織かてさればあはる紙の方へ
ちく重ねて次第よユマヒシテモアリ罗人もそきり少御う
つて用ひ支是いわゆる人情あるや無事うちも

一きせてもゆく流形うされ太底今もうほ京都の櫻張のと並べ不思
の形をそなもあらぬ一き人の用ひうる今もうほくに又流形もせぬそ
れのゆく新作出ゆきとも大同小異ふとすも因するも即ちあら
昔ハキのぐのきせも持者十人三字へも有り又女へ絶らうと長きらう
を二つよ切て丈をおひをねへ絶て長き弃せるかと呑うり仕合付にすりて
懷中すみすみ有脇のあ口を角とすも有根と又懷中きせもそむけのきせも
を三枚すて入すりてゆりゆきん能うけんの長きせもふあら松がて鷹
附と吸ひ入り入すりて仕合松がて鷹くあら松がて鷹
歴久人あとちく用ひてす畢竟懷中の為あり

紙多葉粉入

懷中きせもみる處



懷中きせもみる處



又瀬戸ねきせても有りて肩吸はをきしハ燒やうて摸古也燒付より
是の婦人子供の化粧毒せてもふすりて今も解りあらじも稀にきせても
或もまたハ皆衣類のも解りあらじも稀に

一鼻紙袋するに承人ふすりて銀きせもの。ふううたまふじま升のふ竹の
らうをするが其らうふわとわれを見せて所へ銀のすみをうこせておる
又ねきせ粉入きせも筒を乞む。きあとて極へ銀の銀を長く細りて
銀の火をもきを根付つて用ひて近きはゆり草のうせもふ筒を仕立て
男向御高沙役勤者物へ般の草のうせも筒を用ひる事は歴く是等の
草のうせもつやかと通じて候と人情の類れよ。うを金てモ依草の
形容は走りのあはれ廢りて今も氣向ひ出すて近頃よりは毎利少を貨
きあらをせしむる風俗よ。あら人のうかれへども入あんとい様すとも
可憐物あるをされどうをうきうへ紙を用ひ却角りの間もうけりてあらう
りんを差しむれいあらむとまうきうへ不増らふうしうへてうふうとさめ

あらう行車も多財代かもきもく実の室の差別あくうううひ人情を仇
あり

一鼻紙袋も昔ハツカアで投入を入れて銀のうせ平入をあらうの物な
してあくう支を駕のねゆりみて胸とて直角乃度を廻て銀の平き
箱金毒をほの絃のゆくちう極ふ極へもえふ底ト中蓋を付て内懷^{ヒコ}を
持てぬ鼻紙袋も別ふそ侵入^{スル}又六鼻紙^{ナシ}一鼻紙^{イチ}おと^スとぞこれとて
捨てますてはまみ外懷へ入り細^{ハシナ}とあらぬ如^クとてを取るも有り然^ソトうら
を後ニ傳^スヒテや流ひきて鼻紙袋の通り仕立^スうる投入^スヒロ付てうらく
して書^シ青揚枝若^シ人^ヲを入^ス小鼻紙をもとし極^スうもね^ス今も程是を用
ひの半^ハと^シ鼻紙袋^ハ金毒^ハ小^シ用^スの^ヲ入^スその若きの荷^シ古^シと^シ使^ス人^ハ少^シ
令^シ懷^シす人^有り^シか^シ是^ハ是^ハ一懷事^ハと^シ無^シあれども^{ナシ}有^シ鼻紙袋^ハ今^ハ多^シ懷^シす人^ハ少^シ
懷^シす人^ハ少^シ有^シか^シ是^ハ是^ハ一懷事^ハと^シ無^シあれども^{ナシ}有^シ鼻紙袋^ハ今^ハ多^シ懷^シす人^ハ少^シ
懷^シす人^ハ少^シ有^シか^シ是^ハ是^ハ一懷事^ハと^シ無^シあれども^{ナシ}有^シ鼻紙袋^ハ今^ハ多^シ懷^シす人^ハ少^シ

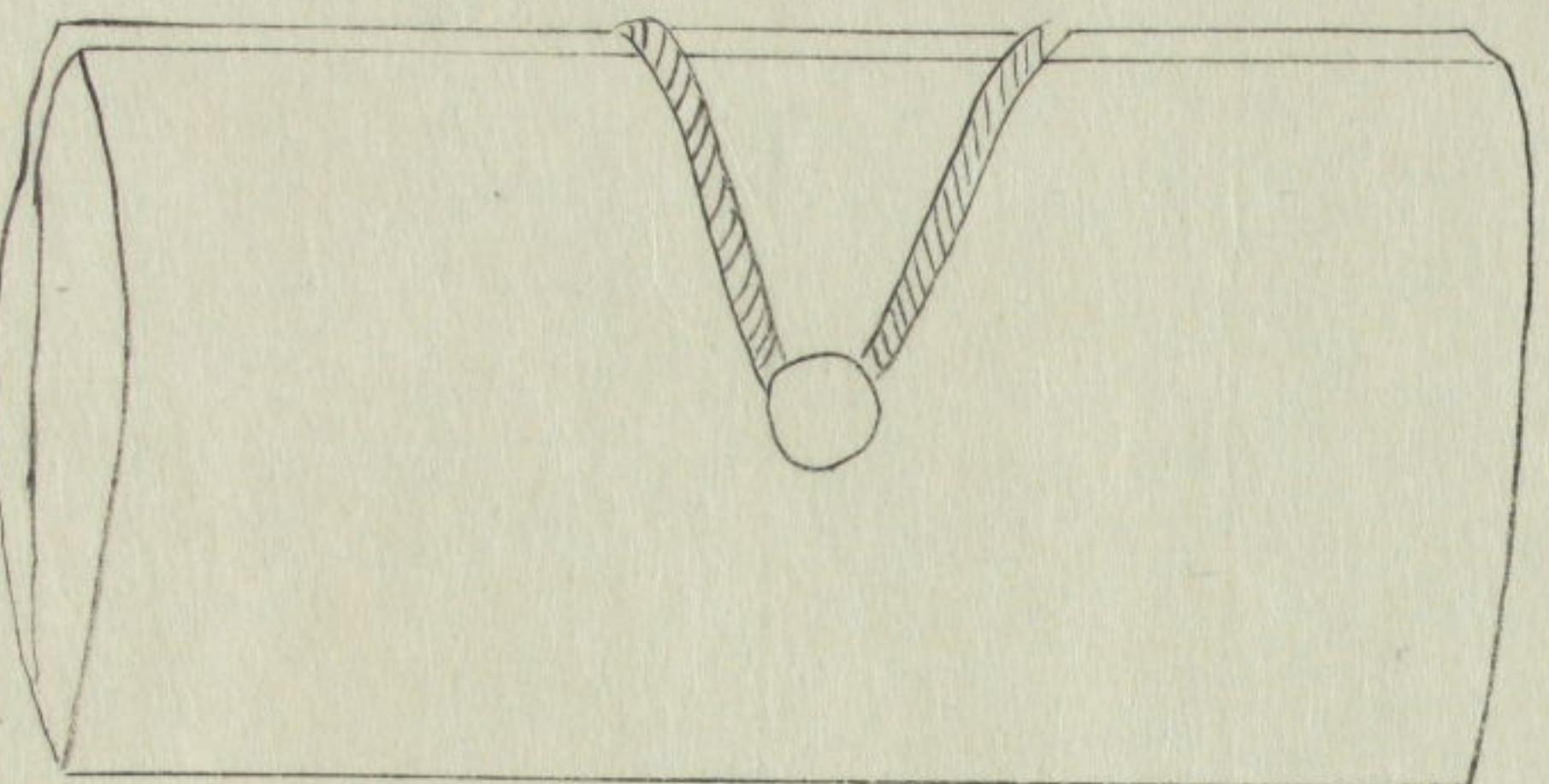
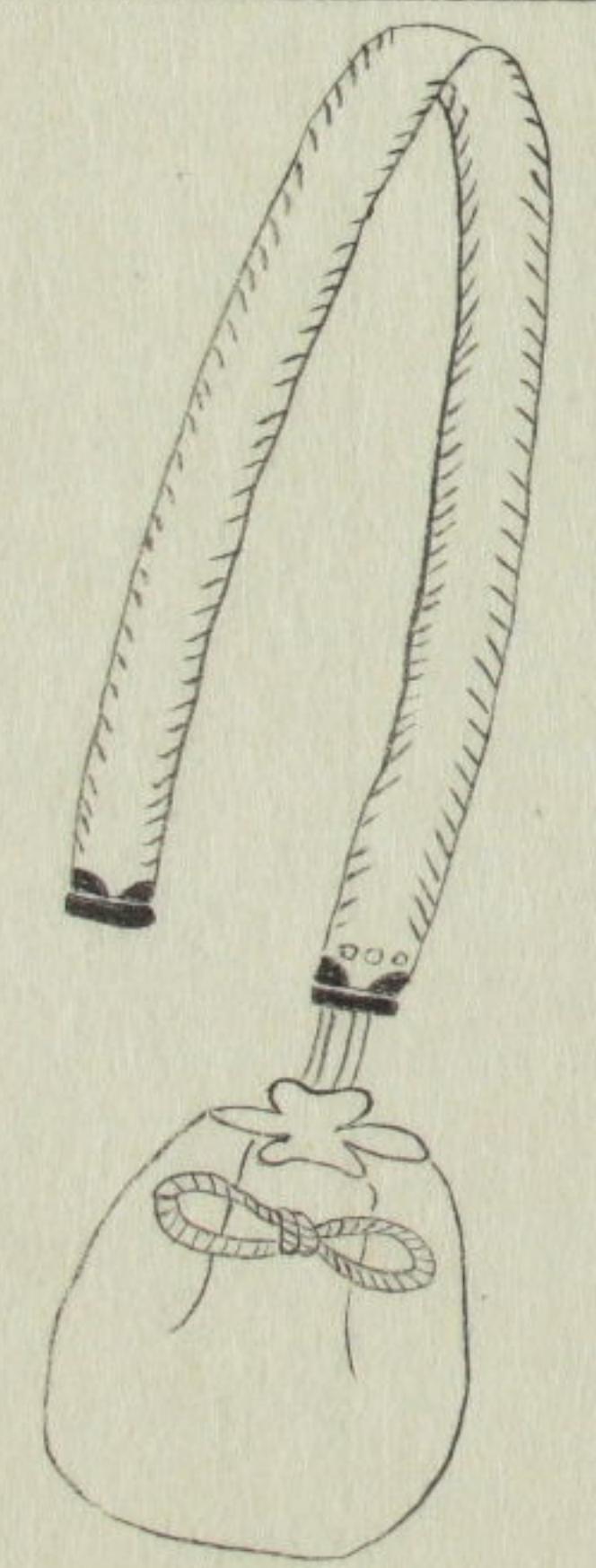
又エヌ事に中ノ石又石廻き室にて櫛枝をとて金玉を田居をとい
テ田居を廻り度用い始よりとせ又至竹或も紙あるとすて大麻袋をうらへ行ひり事ふ
く北袋のゆへ入て懷中すと今も有り得るもは袋かとの事事足り是
をぞんづりと号して着き遊人俗客あんどちく用ひたり田居よりあく麻袋
日本よりあく麻袋て其事の用ひあと

又金玉の左番少さんと云はばと云はば流れて取用ひし

中番のとふ紙通しと付草草と云ふを有て常々身中を拂ひ拂
あり所れ要用の鍵の如内外船又多を不殺の事を又より是ハ也極重室
ある通にて無玉成しに付りてとみ用ひるもあ
又楊枝すと昔ハ太刀女のがす切がキタのと紙からも櫛枝すと
次第よきの玉まで莫と化す紙イ封すと有又折居すと
も極すとまも有名角山みるく有利ある事小缺す

三徳

お提



一腰わもそん遊吉佐よさーしまへがうち中身へ吟味せん身漏るそとをき
くらうとも手縫細身りて切羽細管も焼背りて移ふとの吟味が煩あくそち
身の色あとふて花をふ巻を目めも仰まても食えずく只あさの根も
をゆく用うり今も根ももとひ人有いあらむある程かの事

今も大底俗人の如ひ皆あり梅竹とふくねはおれの對の小根
手筋も有とも身み於てハ吟味もせんか一大蒸量のアガリて大根也
手人を切奉る事ハ一切ハ済ぬ事と大體參照あくとまをうり
もるねえ浦がくすまーうかをもくらへ吟味する無益あり

一肩ナ御番勤^{アシハ}安永被鼻紙^{ヒノ}の腰を元ニ^{シテ}鼻紙を三ツ折りて
すりやく懷中す事流れ^{アリ}射箭先林^{アシハ}見立森川紀伊^{ヒメイ}大山^{タカヤマ}を以る
りそゆく勤^{アシハ}小波^{シオ}小折^{コウザク}の細き鼻紙^{ヒノ}を入ら^スまつるを見立ふを財^{マサニ}の時
ソシ、いふも懷のあ^リ格好^{アリ}してて茶^{チャ}はまだ男のうぐひする事あと流れ
うる振舞^{フニギ}安全^{アシハ}あんどふひ^スとももももひを必搭候^{ハシハシ}ひ茶碗^{チャバン}ふうご

をうくせ挾持^{アシハ}り想る男^{アシハ}かと遠ひしてうぐひすこそも身水^{ミズ}のゆ^スする
あは寝室^{アシハ}の内^ス身水^{ミズ}を掃除^{スル}て水^{ミズ}をもひく^ス入^スて身^スを立^ス事あた
女^{アシハ}男^{アシハ}のとき立振舞^{アシハ}あ^リぬね^{アシハ}納戸或^{アシハ}仕事^{アシハ}不^{アシハ}と^{アシハ}身^スを立^ス
りせそ^{アシハ}身^スを清む^スちく^スを懷中^{アシハ}アシハ^{アシハ}鼻紙^{ヒノ}を三ツ折り^ス用ひ又^{アシハ}
く^スと^{アシハ}ても身^スを清む^スひをうくせに中^スをすく^スぐると^{アシハ}身^スを立^スし^{アシハ}
者^{アシハ}が女^{アシハ}あ^リ振舞^{アシハ}のう^スきを身^スを清む^スてあ^リう^ス事あれ
と始終^{アシハ}すうと^{アシハ}ハ三日^ス年流^{スル}て忽ち止^ムアリ世附^{アシハ}ちうめい^ス男^{アシハ}今
身^スを立^ス者^{アシハ}も今^スの身^スも奥^{アシハ}ハ同^ス魚^{アシハ}ねも^{アシハ}人^{アシハ}の身^スもあ^リあ^リい^ス
えども^{アシハ}事^{アシハ}もあ^リ想^スひ^スて^{アシハ}情^{アシハ}をりて^{アシハ}子^{アシハ}をう^スう^ス身^スをう^ス
人^{アシハ}の殊^{アシハ}が^{アシハ}い^スと^{アシハ}京^{アシハ}の鐵爐^{アシハ}をう^ス養^スす^ス縁^{アシハ}の頬^{アシハ}も前^{アシハ}迷^ス

或へて之を爲すあり

その俗をもあ畜大や畜子すに古畜入又レ酒風を極まで古勤ひふ
音物を一トアリシテの極余の體五連ツ或ミ五物一反ツあくシ事
モテ古畜入は役職をふはと介物の入も事モトと古畜赤あ畜赤と
有て是も又やも入太勢の古畜のくらう括ふす事左をもひより
翁うか叔父の入畜乃時ふき古畜ようんさんを持ちももとと之事見
ゆ育翁う父あそ入もとはゆと持まざりてゆく古の附お廻りの役人
内勤局もと瘦からと酒を持まつて威の太極のぶあんうけもと持馬で
多きもと類父うも稀みにゆく役者もとひして返る役
冷夏のあすれてとくとく風ははじて後へ用一鉢ア合て仕ゆ一筋の御奉
をやせと一け一葉の緒を持まつてとくとく者もとひして返る役
ちふゆのあす場所へ當仕出一ふり付くと世話ひきあつて能事と
うり翁は達頭矣 仰付まはばへ御返の後やつれとも未仕が一ハ止て

由徳政放ふと師匠畜の店差參も一計一葉のり一振序もと至極
勝の六七九しへ由徳政の裏面を清水庵といひて向川候執政せられて
由徳政りしより次かくふる事止て今も四ひの赤あ計もと並び
従業もと使を呑う

○翁小善精無底文 仰付まは一ひいまの内政は以高田原家發行の所
あく一初令会が同役並三人折て料理をめん経日の食事と云ふのとふ
不思議とも極てほ半高をくくりむ者一七ツと算して二十三人
あれ少ぬもくる若あれた萬字と陸本誠後う方へちづくて多拂
二十分の脇を拂つて一トアリ由徳政一トアリ由徳政
あくそひ買料理へ行届とり仕事一を萬字へ終本誠後あくそひ同役
不義を食ふと一トアリ由徳政一を萬字へ終本誠後あくそひ同役
あくわせ者少とも古役古事の立派てうしく苦事取く如をひもあく
勤勤て以ハ難有事と一トアリ酒も飲焉河岸の先般の不のじやあく

香のとじ事かと酒を用ひて是が服ひを價するも亦翁う今
かの手の手を用ひよと極む

○翁う古番入へて多び要水大内番
板浦書道大内番御と自らの御と送り加賀
翁在馬とて多び度並みて量り多くて古くしふ一紀の
而歸用給地の御と送りてからも入事かくも古番のいあきる事も
ありしも仕り勤め跡もつゝ古番不てお番六十人のモく
引て初て西を半そを言え見解に番りうとより日本の有ふをか
主を殊れめてあくと訓え經日の次程へいくと是承對面を交へき
主の授て翁へ迎列もといふも急て御とあうされと伊丹は主居となり
男の西また交ひうとふ候よ不とせふ仕事と伊丹は主居となり
を表ひり十夜以てうとも未だ色あるといひやう有者へうる事
ありふ今之の心寫へ勤列行りたぬよせの身をうて行ひき事
あり

○翁う古番入へて多び要水大内番
板浦書道大内番御と自らの御と送り加賀
翁在馬とて多び度並みて量り多くて古くしふ一紀の
而歸用給地の御と送りてからも入事かくも古番のいあきる事も
ありしも仕り勤め跡もつゝ古番不てお番六十人のモく
引て初て西を半そを言え見解に番りうとより日本の有ふをか
主を殊れめてあくと訓え經日の次程へいくと是承對面を交へき
主の授て翁へ迎列もといふも急て御とあうされと伊丹は主居となり
男の西また交ひうとふ候よ不とせふ仕事と伊丹は主居となり
を表ひり十夜以てうとも未だ色あるといひやう有者へうる事
ありふ今之の心寫へ勤列行りたぬよせの身をうて行ひき事
あり

を実てひやまくせしるに支配をり地へとおほを勤むる西昇殿
御恩の義林の了簡めかくらうあらぬ事とは非難無くゆえ初て風情
要は度ふを有てすがんをうひて見るが國往行じてふむむ初て
登程をうけりせりのうとあるを毎々食たり事を希へ御の是が御
是へ初めふとも搗入蒲洋あとを被喰も人有照て思ひ行うて味
を是も御は減りるる生貨あるともいふせん又面白き地一ノ有すみ
因役官寫さずと多々繪を書きて史を會のとおりて是合御筆
あり是も集大すきゆりより而御の事有りふ画ひも此
流乃へる繪本源氏傳とて小十人の源氏とて画を鄰ねどそ跡并
せふりてもせりとて是も白鹽入太二郎二枚の屏風を持來
りてうせすふ降入え東不学あれ虎渢の三笑といふ事を御うて
居られとて是も三笑といふは傳と唐人と石橋の邊ふくを描て其
てまたうれを画へと望む鄰松心得と是をとてうれをうそく

とそ立盡てする亭主の親類ありて不貲由繪を祥見仕合と拵シリ
行ひ立つてよしや一席ふ入之へと被入座よろあらう被屏風を
果て是の御吸の三教とゆんとすもりをといひ去因役されひよは是とて
秋遊とてあ遠をう一是の老子れると圓明陸子祥をうして齋
中川勘三郎と云ふのふ汗を擦る御行とて居りては寝持被て
涼氏繪を見ゆまくとく一箱を出へりふ伊勢よりの繪の故
も明ハキラふものあらゆの心をそぞり面をき繪イ卷端ねづんとまを原
繪とひづのひて吹聴イタマツルくも有れどもそのうと
思ひ居るべし。附り面を紀事ちをすや強らひます。めあもあ
れ。とあふまく

一翁うす供の時處言せよと風をとふ板くわなをとむ大風をもと
う翁へ生贋附り風を不好へまゝく西の内紙十夜経過へと朱の
測演をうす風を人の板でうれしき三行を持ひてあけつまく

法事紙を引てうちを出の因へ入松あらうとまち馬の店へ入り新夏敷
肩かたに附着つきつけするの而してる紙がふうりしうるの内紙三十六枚半の風を
拂ほてよすり早竟はやい大人の歎かなきと云便の不^ふ紙しと云ふ

今の革双紙又名アマ古ハ子供の見聞みみの爲ため楠一代記義經一代記
あとアトて実を餌えふせ或もハ辞ことうざ。枯木生死咲セザハ解合
哉。又ハ金平ヒラ平ヒラあらうて勤善懲アシキの奉まつを失失ひまづる
今ハあるゆく當あらえかくまよ紙しふむの事ことをつけても
らそ人の聲こゑとある

之外ハツ花九曜の墨螺鈿モクロウジンあるどり形かたちをよくうらへて家いえを
上あげり約合あくわたケ巻風まきふうをともみへり中なか今ハ子供こどもの如ごとく
く三様の袖そでたとえたとえたことを嘗なめてるよよりもせんをひこうえとて
樂うきこと日ひをくじに持もる事ことひあくまき次第じだい人の心利こころかこと
ありて去年さる年中なか不用いのうの物ものを費うしてたとあんど金錢きんせんを遣けう

事ことあへ是これの小腰こしの如ごとく一成イシヨウを度とて計くりう

一成イシヨウ下しもを度とて十五じゅうさく小こあ半はん麻ま下しもにせひとそと有あ腰こしの中通なかどへり
小こも細ほそく表あらわすはまく流ながれも常つねの腰こしも今いまの如ごとく二丈にじょうを定さだめ
事ことあへて馬まを傳つたひくを入いれてたをへ廣ひろげてすりとて次第じだい小こも細ほそ
風かぜ傳つたひくを近ちかい度とあは應おう應おう傳つたひく神福仕立仕立て所所付つて勤きん仕しす人あとハ被は仕し立たて立たてての事ことか。一朝いっしやうの後のちの被は仕し立たての腰こし傳つたひくは風かぜを用もち用もち下しも國くにに
て二にのひと屏びょうとて居ゐて居ゐても傳つたひく腰こしを廣ひろげても極きわめを
うそそ後のち馬まを傳つたひくと内福うちふくの人ひとと傳つたひく腰こしを絶きりると考かうへ一
年いと十じゅう歳さいの他ほか腰こし馬まの初はじをとひて自じからしふ形かたちの如ごとくも小こさ
めこう馬まも連つづく腰こしあへて今いまのうそ腰こしをすゞすゞと馬まを傳つたひく腰こしを絶きりと
考かうへりと腰こし紙しを入いれて仕立たてもとをひそりもく流ながれやうとばは仕立たて所所付つて馬まあるもの腰こしははまうり外ほかのあへ
逸いつハはうり方かたともを通とおふ仕立たてすあり

一羽織も世々小姓を以て延享實處の後、今の通り並の羽織あり
一羽織の腰帶とて、其の名は、久々重風也。より羽織も、とくあり。
そ對丈位の羽織を、とてねむるありて、久々天運循環也。勿ち彼
長羽織や、とて、經き、羽織流れゆかりて、經きも、そりの角袖とて、袖も、大き
きが、終り、そち、計袖形を、そりの角袖とて、袖は、經きも、そりの角袖とて、袖も、大き
羽織の袖の事と、持持ひし、あら、位の經きも、そりの角袖とて、袖も、大き
きが、そり、つゝと、あく、あく、又長羽織も、久々天運並の羽織もあり
終りも、かく、終りも、そり、ユヌカ、ヌカ、ヌカ、ヌカ、ヌカ、ヌカ、ヌカ、ヌカ、
モ、久々世ふ、四、五、佛道師の紀述と、ソウシヨウジの如ク。

身代の崩、と、次、紋面と、ソウシヨウジ。

羽織の腰帶、とて、腰帶、三味線流れゆ。

豈、渡席も、渡席、か、さ、と、ふ、あり、文、か、も、昔、そり、ハ風流、か、う、と、ま、か、の
不、能、の、傳、り、と、ハ、ソ、も、と、經、津、津、文、字、を、ま、と、て、男、も、と、一、聲、も、と、

と、き、そ、そ、も、そ、ね、と、あ、く、り、そ、ひ、そ、せ、そ、ゆ、と、て、ま、と、人、魔、者、か、く、も
名、を、葉、ふ、て、女、ハ、文、字、に、文、字、ね、あ、く、そ、け、る、女、若、あ、く、の、袖、を、小、雇、れ、行、き
あり、義、を、更、席、も、持、て、外、流、れ、ゆ、る、是、ハ、九、旗、半、腰、く、と、て、袖、く、の、き、う
そ、腰、く、傳、席、と、て、言、流、れ、ゆ、む、と、そ、り、そ、り、か、と、り、ゆ、て、は、戸、よ、か、く、の、因
く、そ、者、か、く、一、是、ハ、の、を、流、れ、と、す、そ、う、だ、り

故、席、縁、の、流、れ、ゆ、と、事、般、一、事、う、と、腰、く、の、半、腰、く、の、次、男、三、男
二、腰、縁、に、ま、有、い、あ、一、野、も、ゆ、と、毎、夕、ト、腰、延、青、の、絶、え、ゆ、あ、一、け、と、う、と、う、
と、り、や、か、あ、り、て、そ、う、の、き、古、り、や、の、袖、を、ま、人、裏、り、と、う、そ、う、と、う、
葬、止、り、と、て、ま、人、往、去、を、止、り、と、て、腰、く、の、内、福、幸、河
京、者、の、ま、れ、一、女、形、か、あ、り、立、夜、融、役、か、と、ま、ま、か、く、の、戲、き、ま、り
同、女、藝、者、流、れ、ゆ、と、は、ア、場、く、遊、不、れ、や、ふ、及、之、並、の、不、可、も、藝、者、の、二、丈、
あ、可、所、か、一、脚、り、つ、づ、と、言、京、都、の、賣、女、の、傍、み、あ、ひ、ふ、く、り、賣、女、を、より
神、て、ま、帰、の、女、藝、者、十、三、人、衣、石、捕、と、事、う、と、う、皆、藝、者、を、遊、て

松本の御者ありしとて實政の改政より御職も慶者も三種縁も皆止
て而神より

河原阿房ふ守若一とてモ須へねも延喜へと事へ實政改政より
アキニ事へ一切ナリ御職も正徳の為せ御職もソレノアラシノ所
リハ馬糞御職或ト麻糞御そひの所也

年を一ニ筋のまの毛使く御職のとくにこうむよろ

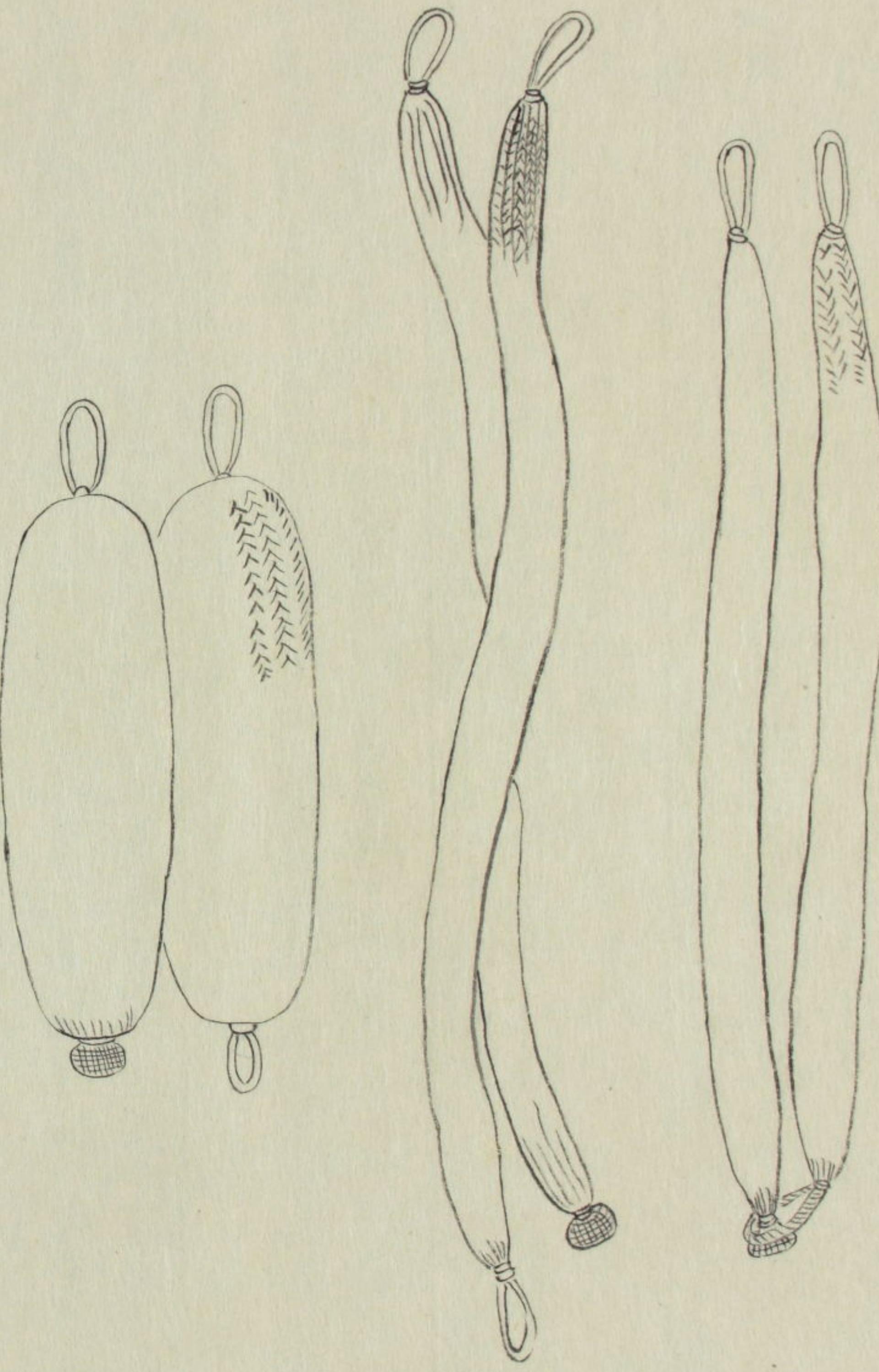
一組織のひすいとて流行り先年おも田紬にて長き二寸或は六寸位幅の度
縫締の糸へわるゝとて舟舟をそ是ハを流行りも事へ又細き舟紬をいく
筋も舟を挽くも有足も舟舟うけあり後之報の絹を紬のとくも
有りうる舟の舟りあらんと船所新ち萬大番筋うらとリ人五百石五
着くと獨舟あり船の折くを乞之遊ふがふ私内の舟のまぢん縫の羽織ニ
少袖を附え被くもすりそひの遊ふの時をそ彼那内のもぢん鳥志世
と流れても事少て遊喜ハ皆絹をそひうつり今より見れへ却て意と云

思ひれど

又その赤坂氷川門神社地の譲り賣文有て其の外盤島へと車へ
タケヒ場不昌久子成の時計二枚を源賣女追拂りて掃除地もあり
主を蒙恩すり松平左近は監風執政のひありと後因幡守改政執
政ありて後ハ運了地ばかりて殊の外盤島へと自身着物を並て
空納金無となりこれを手すり天子の君賣女の運を手すりとて奉優若
くとき事えりと後實政改政をひりて又掃除地もありと又モひれ
荒端所とて源義忠荒端の令を出させ古稀の信令を片舟とて往復の
一即ちあくまで中次をとて信令を出させて古稀の信令を片舟とて往復の
権をへり易くえて用人と互射一法子の立身を取持て内令の直堅
室の床枕の附れを而て助隊とて一ノ井山お伊とてそんせの御田

110

羽織の綴



一改巾も又く流行りて底太黒のめをくり改巾ばかりもとつを付て襟を
鶴で用ひたり是は着る生をぬ以前よりの改巾から更に年來の人少へ
後人あとのうへて之を後ハ室半節改巾と云ふ年改後考ふ源村に角ふ箇
を表へて後ふもとうを一丈計り捲たるの耳と鼻を包む後小擎ふ
細き縫冉のねあれをとくを表へ付へりせまうをたすのねもうをと
の下よて縫へと耳もともをうひ箇の脇りとよと卷廻又ハ折てゆふ
はまよて是はのみ因よ立じ今もうす人有又左右の縫きなんざへ
ふ縫のあとの斗かて角改巾とてとも有又因斗り改巾とし鼻の上通
因の下を横せあこまで切を付て片方ゆて牡丹紙ふす様かとうすも有
是が後く書
制やくさり

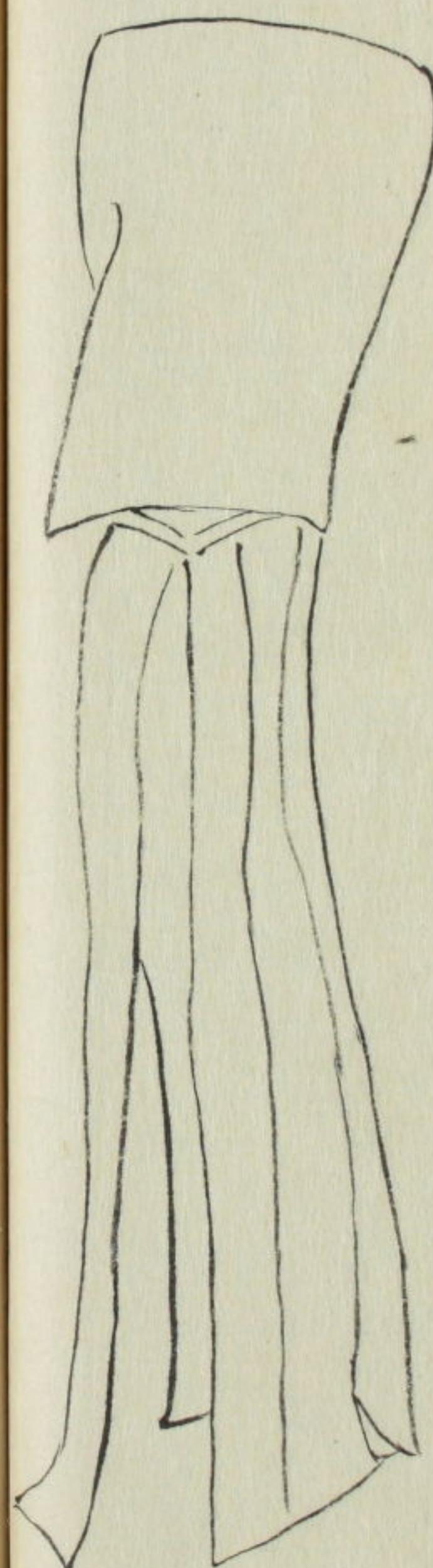
又始のうり改巾は想ひふあらうを付てもあらうの脇りを因計り改巾
のゆく因の下よとてはなして角ふも有又因縫程ゆき事え
む太源の丈半節改巾も當世通て之をうの昔よりあるき事えと昔

改巾奈方を三九八十通う

本ノマ

又強盜改巾とそ特のことをめくちりんと極つもあり草^{ハシ}綿^{ハシ}あと
之を細^{ハシ}てもうり紙角^{ハシ}（骨もあらむ革^{ハシ}の物^{ハシ}）のうそあき^{ハシ}まのうのえ物^{ハシ}
又誰^{ハシ}の工ま^{ハシ}る袖改巾とそ主筋細^{ハシ}て大あら袖^{ハシ}を経て袖にとう顔^{ハシ}
をゆ^{ハシ}て敵^{ハシ}を能^{ハシ}精^{ハシ}よ袖^{ハシ}の左右をあら（ひうけ耳^{ハシ}）くれの色針^{ハシ}を改^{ハシ}
うり襟肩^{ハシ}（ひしん）風^{ハシ}を薄^{ハシ}く板袖^{ハシ}の下をそりて裏^{ハシ}くれの目付^{ハシ}
見^{ハシ}を顔^{ハシ}へうまく遊^{ハシ}言^{ハシ}の用^{ハシ}ふ焉極^{ハシ}まで能^{ハシ}興^{ハシ}し^{ハシ}うりのそぞれ
強^{ハシ}が流^{ハシ}れて半^{ハシ}旅^{ハシ}ともみよ^{ハシ}くろ是^{ハシ}の色^{ハシ}を薄^{ハシ}く左^{ハシ}主筋^{ハシ}内制^{ハシ}禁^{ハシ}
ありそ今^{ハシ}ふうする者^{ハシ}（女^{ハシ}）うすみの聲^{ハシ}へうそす^{ハシ}と毛^{ハシ}うり

宗十郎
改巾



角改巾

神改巾



巾改盜



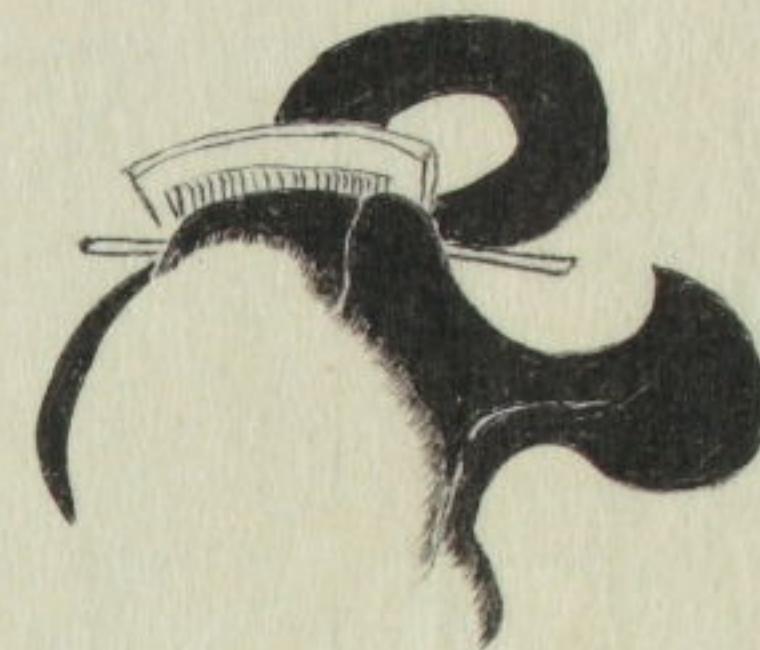
又思ひゆう候ふあくよだは此^{ハシ}年^{ハシ}の近^{ハシ}へあさやりやをゆく^{ハシ}うり
草^{ハシ}みり^{ハシ}て^{ハシ}る毛^{ハシ}紗緩^{ハシ}の捨^{ハシ}服^{ハシ}緋^{ハシ}の帳^{ハシ}書^{ハシ}或^{ハシ}小役^{ハシ}人^{ハシ}あらみおと^{ハシ}か^{ハシ}一^{ハシ}日^{ハシ}鐵^{ハシ}
よそ^{ハシ}うりうり今^{ハシ}の庵^{ハシ}紗緩^{ハシ}御^{ハシ}も^{ハシ}人^{ハシ}も^{ハシ}ある

一男女の聲^{ハシ}も^{ハシ}なハね^{ハシ}み聲^{ハシ}り^{ハシ}先男の左^{ハシ}脇^{ハシ}ふ生^{ハシ}れ^{ハシ}音^{ハシ}く^{ハシ}若^{ハシ}聲^{ハシ}

のうす角を切てえ縫をとひのとてえ縫をうけたちへもく耳の後
とうわけ發因をすゝ者があのうておまくとての是ハ捨トびんとそ若
元ハリミドの和びんをうきやうまうり丸くとくうきとて放縫をすのは
争争山ゆひて、分別の山腹山腰の聲、放縫良らにまくどぐキテと中
判をいふも度く剝縫の間より中剝の見ゆる松ふして根をゆくい
けりこんとてのる終りと日代の聲きよみねふきうけとあらうを
據所ゆき年波者ゆきあつきとて磨くとも若き人まへ隨うものとくを
甚と下落て、石廢をあつて松木無れのちくゑ又至本多といたる種
變たうりそむかくとわけといふも少く豆程ゆくゆくあり又を
後庭士信意のまけをほそ不長く延てた庵家押ノ井兩ノ程ゆて
ゆくとく又まよれの風とて町家の若者あらん發見是を甚しく剝ゆけ
まくとく後、こふくと發をゆひうり是をうみまくと風をひて
又巻縫をせせらひをとて捲すけうきひと巻ぬゆひうりとも被釜

風より後の事くかもむく一縫ひうわけ流ひうり遊女の縫ひこゝ
かひ初ひうりとくとくを後てすまの流ひうりの焼薪ゆんとあ様の焚
を見事小毛筋をするて燒薪のゆくとゆひうりをふむくとく
の流ひゆて小ちぬいふと多くねあくうり又男のひくとも小家を云
て縫をせし上計家をか一角を入候する温わすて若き者へ志見
舟も宜要右流ひゆうりを燒薪のうせらひを厚くして御心懃

勝山



燒範發



三草美

卷髮



一
前ふ記ほ地紙賣の行へく時うきよみとひあやとて是も小ち羅頭形をて
是は年停のちゅう歳つも引ゆくを付て小葦荀の松麻苦を脊扇て取るの
剝あらひを入商ふ歩びて是は夏ふ涼ひに草すゑふあくを廻て山見
あと歩みて草すゑき地紙賣と同々今も廢りて知らずれどもかし
一
胃八口山ハ秋迦の誕生とて少しき鹽へ茶を入やふ秋迦の誕生のすきをと
西根ハ色の紙折とて極^シ妙光ふとを付ね葉の坊主戸ノ影をね
おひづり而波^モ入り一張^シ鉢^カの敷^シ縫^スを告じて又肩^カ有
古^シハ輪^ス魔^モの形を被^{ハシメテ}有^リあく^シ持^ヒて^シ縫^スを^シ蒙^カて又^シ縫^ス
廻^スといすのすきとて^シ加^シ坊主の首^ハうく^シ松麻苦を胸^ハけ^シも^シの
中^シく^シを^シむ^シの歎^シを^シす^シ子供^ハ見^シせふ^シ猫^ハと^シそ^シお^シく^シ又^シ人^ハ
坊主^ハ一人^ハ面^シきりの有^リあく^シ銭^シ辞^スを^シよ^シそ^シ於^シ秋迦^ヒと高^シ
ふゆて市中^ハを^シ往^カてもの^ハ世^シてりむ後^シと^シえ^シ人^ハ猫^モく
要^シす^シす^シと^シ世^シと^シ有^シ品^モと^シ見^シてりき^シの^シ芝^シ島^シ町^シ

四面居てもよし 神居者有りたり 小男あれとも能き男材かと心を有てま
も白く立ちも坐れや年八十才より更えり あらうの姿をうちひもふ
接き多く身へ延べ油を付て立ちくまうけ小笠原のと近接とて角の
そくある様にてやうりもまかれて奥事ある聲そぞり宿禰子の市を
善と考案ある多慶石をつけて出を君下迎を経をうて中臣の接を續
てあらうるむち方舟の正名の窓トあるとて一張の毛比内を費してやうも
ううきを立とありて経をうて中臣の後をうみて多慶石の側ふ
今之度極の心もかへん唐の心 嵐の心又さへ嵐の心

一又そぞれ志遠朝と辻羅祝をうて世を離る者を有りたり古今の歴史と
人やもあをくとおて旅のゆけとあみあらすと人をへちまつともゆりに
記録を羅祝する印のかゝる内室の事をうてまよわせさせども
はをいし極く小粒在て人を笑むる事 希代の者あり信羅主長房が十八年
羅祝をうだり

八九すのあすと男根の形をうらへ生をもす持て櫛子を取上シナシト面向
きわらわとをりて皆顎を解てゆの唇をあらうきと至る所をみわせとあつ
てそをひめあはせ下卑に上品の事計をひく毎日漢書へやうり御書堂ヨウジヤウと聞
者群集へて常人あらうる櫻柳ヨウリュウから業とて世をわざりのへ遊ぶ
孤くほや人の事計を訥ふの歎ふ志遠朝の女と山歌う歌ひとて婦人山家の歌
円ありてあらよ文り居ふと歌ふとあらう歌ひとて邊の唇ヨウてまきぬ
桜と歌を歌はせゆの婦人坊をもあらひ極面白きのあり大名や人の招れ
て玄蕃の答意あるとみ羅祝するはては通程錢を下田金三三郎へと通
笑をせりとひて昨年少しきう像をねひうて賣てうへの諸人衆もと求
ふ前ハシねりう是ハね羅祝ヨウシツめちくは実質ヨウジツと云ふ事とてせよ咲くる
諸祝師有り是も上りまこと想ひえひきりて又の序ハシも咲くる
翁う若年のひへくみ羅祝をもあり咲くみの介流れる者えり

一相学者よ神龜堂にて京都より下りて殊の外江戸へ下りト益者
に手渡左角といふ者あり是も世界のぞりと云ひ今ふ市中のト益
者の首枝手次をもとめせむ所

雪裏馬シロクマ一毛近雲列の相撲小禊迦シキヤの獄名ハナレノ軍事アーモン天明殿アマツミヤ一毛はもと
底シタ筋スジの事モノ相撲シバテいのとくのあらわれを傳ヒサシても大至
きそ半筋ハーフスジ金カネ朝アサヒ吹ブリも彼ヒム学ハジメルみをる事モノモテ此後番町ハシマチ
近アラタニ櫻町シラカマチ自通シラマツ紀キ列リ遠アリ魔門マモン近アラタニ序シタマツ二三所先アヘン縣ケンきの
集シテ櫻町シラカマチ人ヒト車カーペット有アリ人ヒト生ハリ辟ハラハラ狂人カーネル宣キタマツ曉アラタニけケかの
群シテ集シテ事モノと出ハシメル進アリ迎ハセマツありて向アリ見ハシメル人ヒト腰ウエスト上アッ手ハンド
ゆきそれて身カラ松井マツイ梅馬メイマ多アリ人ヒト見ハシメル事モノ集シテを
あしりあるアリと你タレ急アリ坂サンをりて雪シロの門モード度アリき跡アリ人の
散シテ休ハリをハ禊迦シキヤ獄ハシマチ連シテ者ヒト別アリ急アリ禊迦シキヤ獄ハシマチの裏モード入アリ
足アリを始ハシメル肝ハリを皮スルて彼ヒム勇アリを感ハシメル事モノおハシメルシ め語ハシメル

一又モテ松井底源左馬シロクマ者有遠摩賣アリマヨ之ノ諭ハシメル今アリモテ馬連ハシマチの營
を雪シロの下シタマツ主シテの御ハシメル少アリ持ハシメルを商ハシメル見ハシメル附ハシメルの廣アリ小瀬ハシメルが
場ハシメルを取ハシメルる所ハシメルをあらうアリ而ハシメル居合アリマツ三尺アリ計アリをやハシメル一アリ丈
九アリ厚アリ寸苏アリの力を以ハシメル御ハシメル居合アリマツを授ハシメルその練目アリマツ事モノ
又アリ小者アリ主シテ力アリの後アリ足アリ筋アリをもきてぬアリ又アリ二方アリの手アリ奪ハシメルて授ハシメル
彼ヒム三尺アリの力を自由アリの如アリに足アリ筋アリをもきてぬアリ今アリ見ハシメル程アリ獲ハシメル
て返ハシメルすも勿ハシメル近アラタニ松井底源シロクマと同様アリ世アリの人ヒトかくもアリこ處アリのま木アリ
今アリ濟ハシメルよ居ハシメル　若アリ猿アリ始ハシメル演ハシメル近アラタニ馬アリ　風アリ附ハシメル一束アリ
脚アリ發ハシメル又アリ加ハシメル足アリ濟ハシメル

市中シティの周アリのゆアリの傍アリの前アリあ誓ハシメルの見ハシメルせふアリと笑ハシメルを嚴ハシメル青玉鹿アリ
之ノ積ハシメル又アリ又アリの室アリとそはく櫻原アリ初アリ玉アリあら鹿アリともう足アリ
一アリきえありをうらアリありて繩アリを氣筋アリもあアリてぶらアリをうんアリ
てらアリを室アリうアリ市中シティの子供アリが體アリうアリうアリてアリも事モノ又アリ

とて文政後漫者の中を集め一冊とし其の外に二冊を別
封。一張付と板紋一つを何種と定めとて家と家と持ちの或巡廻して四つ
主紋不る者を付を以て之紋不二とも不する。人をして有る者の行う皆紋不ぬ
付て被張付と付を以て之紋不二とも不する。人をして有る者の行う皆紋不ぬ
始へきを煙艸入松のわへり後より反物拂筆拂地の類とゆふ
極きりて三笠附の類と改ふ後はとくと類ハ皆停止せり。まことに
一船籍もその流れたり。若ひいまと生れんぢこと父あらの船籍をもくもく以
ナすれてせよか。名ハ船籍師有て五色を要あとみてせり。もく
もく生れ申ル其の跡どうぞ細合ひとて此の柳生播磨もとる父あらと也て
參きりて。中島の船籍すらに至り近邊とて世活事をきく。殊の外もくもく
篠原小屋のりしがまほのものを集めて小冊うして武田川と号してや
うに近づけて十篇近い。その後程は戸技術といふ小冊を数篇出でり
力も育て面白き。鳥者へり大家とも多く細合ひとて是れ
うに画も能きたり

初の鳥者へ關ひ。四時の詩をもく箋五指明輝。夏雲奇峰。秋水
波に波。秋書後は。財雲機を抑へり。林家の者と。り。善活山賈明。義
田社湖十あとなり。も。一。り。つ。有て。波。の。り。鳥者。小。波。の。御。を。友。と。
万。を。せ。れ。は。鳥者。入。あ。ん。と。つ。事。そ。う。ま。だ。す。り。も。や。寒。の。御。を。友。
す。鳥。者。も。あ。く。万。を。ハ。折。く。り。も。極。ふ。感。し。今。い。ま。を。心。を。か。

一画家へ歸り。世ふ写すもの。多く。の。う。り。の。う。り。の。う。り。の。う。り。の。う。り。
ありて。鳥。を。か。世。ふ。写。す。り。是。も。わ。く。田。山。家の。隣。小。屋。を。洋。顧。し。と。信。あ。き。ハ。こ。う。
其。か。子。ふ。鄰。ね。と。て。不。可。記。近。画。を。う。て。安。の。人。有。て。大。小。家。こ。も。か。り。て。も。す。

一画家へ。文人とも。か。り。細井廣澤。文三郎。実名
細井と云。

有底の所代。寺方。小。云。○。は。手。を。き。み。ま。と。り。う。と。き。う。り。う。は。は。手。を。示。し。ま。縁。そ
石。す。り。佐。先。キ。有。る。所。代。小。云。は。手。を。示。し。ま。縁。そ
佐。木。玄。龍。同。文。と。圓。子。恭。源。内。の。深。喜。鳥。石。あ。と。り。う。れ。も。見。事。あ。る。事。え
圓。子。恭。う。子。と。其。寢。と。云。解。又。親。和。是。ハ。与。カ。レ。近。き。江。近。海。不。世。ふ。り。て

もよもして衣類の際よまと革添を携括りて之程之親和外てモノを
を親者と以ひゆせふゆくに鳥石も志源河くる者と云ふ鳥石名あと前て
石よきの形有を見付かれて既に森小祠をして鳥石社と云堂上元の御事
書て御を掛くに御事有て至る事よりて堂する云人やも多く業をやま
御事とす 辛巳年代某 是が事よりて天孫の御事を國路の手に押す
御事とす 辛巳年代某 是が事よりて天孫の御事を國路の手に押す
折々安きをもよみや第うしろそひを世ふゆくよりのあり

このの國悔也繪経も石の御事と連まく
所も御事と鳥石をすて麻布一本松の氷川の麻布想模也といふ
額ハ鳥石をすて見事ありと傳ゆきを波近御事すて見ゆへり
も鳥石をすて見事ありと伝ゆきを波近御事すて見ゆへり
貞柳革筆をも每一年事も老とあらは廻りて波氷川の御事を見ゆ
若と附えどもとたひよ遠ひて御一體内侍九郎 伊豆守 鳥石へねど
革筆四えひねてとくづけだ思ひありて能く考れへひます形容

もよもして革力の事もあらへ奇めある事あり

一枚武藝も着う若年の次へいまと

有廟の御餘輝残りと 義子 豊中あらへ猪之原ともに実の御事古く今のみくうき
も事からぬに今へ着ても免許をもじりやすを掛く弓馬をもじれ
餘御ともに御用とて業の利く人少例より半極ふあくへひゆくと
うや一通所あれハ被事もんをひるくとくあとりておちやすとあく
あつすのも行のむはあく人の下事もよほくうじとやすうて行を
教すやんひくものあたひをするも藝御書とあとも行の其件の
の難い事あと書を功もゆく自この二支一つ二句全門キレ 事もね おも事と
事の内裡 事の内裡
事は免許ありとも支へ修復とすりておおに事も書を懷らんがとてあくふれあくひ内裡
よもよもがり居て御事と御事と修復へ修復をよもよもかかれて本の外の事の
こころを明しておあらぬとて先生とおもとて事の御へお鳥やキ事とおおに事の御事
みて年事の人有た先事へ若年へ大慶御事のうけも有りの之既に修復
事年後仍せられぬ事をゆうされぬ事とおもとて事の御事とおおに事の御事

をひつても有又薦アシタツことを志すもせよわせをあらゆの事アシタツがあつてわせ
テも有附アシタツをさうりとゆきとがふるあるくもへそり仰アシタツとし差列アシタツあ
むとえをさうり昔アシタツかすも附アシタツをえりとひと當所アシタツのめぐる佐因松アシタツのふりの鳥
今もがく又先解アシタツすりやせえすとりと車アシタツもあくすぐとへ軍事アシタツを誠
されは定アシタツりする了簡アシタツあるとねとすくもを垂下アシタツすりと車アシタツもあくすぐとへ軍事アシタツを誠
ク要薦アシタツすま此薦アシタツあめにまき事アシタツを越祖湖アシタツとすもとひちの傍アシタツハ先解
すも有事アシタツがてあらゆる薦夫アシタツのりとも船アシタツ又傍負アシタツといひの御下アシタツ
車アシタツあらんもヤカアシタツとつみ功アシタツをもととまて人アシタツをも厚アシタツくまふの
糸アシタツもあくと急急アシタツを師アシタツを音アシタツの薦アシタツ廣アシタツとしとすのあり

近事常同薦側アシタツは世話アシタツ有て夜アシタツと薦側アシタツ見アシタツか立アシタツて自アシタツの前アシタツへ
朝アシタツ曉アシタツと多く出来アシタツりて奚アシタツ歎息アシタツすき事アシタツも古曉アシタツのえ祖アシタツの皆アシタツ血アシタツ喫アシタツきよ
主アシタツ仕アシタツあ力をも自アシタツら流アシタツ使アシタツ立アシタツ師アシタツを立アシタツとアシタツもあくと
今の人アシタツもを活アシタツ人アシタツ莫アシタツひと底アシタツ下アシタツ押アシタツひと師アシタツを立アシタツと

圓流足田流一刀流アシタツもとも世間アシタツうり才アシタツも流名アシタツ史アシタツを今の人アシタツ情アシタツ力アシタツも
掌アシタツ力アシタツも劣アシタツりて多々のものに丈後アシタツすと事アシタツと流名アシタツを立アシタツと云アシタツの途アシタツ方アシタツも
あき事アシタツ。

一毛ひら側アシタツが安富軍八アシタツ十兵アシタツ馬アシタツ射アシタツ竹中忠亮アシタツ幸田源
左衛アシタツ兵アシタツ者アシタツ也アシタツ家射アシタツもとてアシタツ事アシタツの者アシタツを立アシタツて世アシタツを
もと毛ひら馬アシタツハ翁アシタツ也アシタツ人アシタツ倍名アシタツを後アシタツ名アシタツ多アシタツくして世アシタツを
の神庫アシタツよりちの馬アシタツ書アシタツをゆかアシタツて腰アシタツ圓色アシタツと立アシタツ取アシタツ小
脚アシタツもと免アシタツと立アシタツ取アシタツもとと不可アシタツにひま人アシタツ多アシタツと百馬アシタツの圓アシタツを改アシタツ
ほアシタツ三年後アシタツ一アシタツたアシタツことアシタツは四谷アシタツの山アシタツの
三アシタツ人アシタツ者アシタツとてせとアシタツ馬アシタツれとアシタツて實アシタツは立アシタツ大名アシタツ家アシタツを旅アシタツたアシタツと波
門アシタツ人アシタツもとひあうりうりとアシタツの手アシタツの立アシタツ門アシタツ人アシタツありうり後アシタツもとと流儀アシタツを改アシタツ
世アシタツもとひて赤坂アシタツ松原アシタツとアシタツ大名アシタツを移アシタツたアシタツ後アシタツ本
馬場アシタツとアシタツ新所アシタツ馬場アシタツとアシタツ方アシタツを移アシタツたアシタツ後アシタツ本
馬場アシタツとアシタツ新所アシタツ馬場アシタツとアシタツ方アシタツを移アシタツたアシタツ後アシタツ本
馬場アシタツとアシタツ新所アシタツ馬場アシタツとアシタツ方アシタツを移アシタツたアシタツ後アシタツ本

と馬飼の馬取ふ縫く幕を張り機器を構へ草履蒸氣酒肴も
やかま及機器を而て廻転け旅の風景より始は花家とそき年免許
諸もさむを人必一務先をわづ地名二んのうさんまより免許般シサク_兼免
年のかねにふ不殊を馬経て極至税自負軍政をへる御のゆ
を一經運あら縫をして三石あひまのうちをみて小ちかたを方
陰長方經かうの板の近きを左席で主者あらゆア思ひふ一さんを延て
仕合てて並んである事もて能見あくろ青人の年忌一とそき税の競馬を
鳥羽へりて縫よりけらか旅のうへ馬のやへあらか二秋のめを縫い
渡一場中御御イ☆番割を協ハ遠ミホモ小機括を通す少所を盛す税素襖
馬帽子を馬のまちの形を首尾有て中より縫ふありて縫ふ役
袖をえき声の響く三石たふ用カタマリかのう節を遠ミホモをあく
害と見ええり同くそ財赤度う可乃乎子殿建庄佐の本機所
馬飼もハッぬを鳥羽へりて同格京源ちた馬ハニ三番町の馬飼も

草庵を鳥羽する事もあらん機器を見物へりてあらん御
馬帽子と馬のまえ檢見をへりて皆れも一世一代あり被も是も花也
見翁群集トアリ事カタマリ

信廟の礼年を好せむとてそばに御流仰へる事へそばに観世を更
章奉納と筋透機門外所地坐キハシ寛延三年の一世一代をへり御視の舞
墨をへて時矣十五とリ事へは度の内役者とも集りて跡ハシと見物
巷旅夥ハシ能くも見りとも云ひてりけ観世へとよもて駕を校訂
して改の新板の繪本をかくと題安君の墨林大字が一代の詩文文章公板
印する等の事あらましあれど羅ひ文集の介世とみるも集は實及花
雅費う面多とせまると被家士のゆへり観世へいと慶母の改
に城内裏剝後観世を更全春節進へりて後寛文七年京板の改
觀世を更節進能を身羽する事へてへ同年家生鳥羽へりて世付観世
廣見てを計りてありつゝも節進能を身羽へり能も機打へれども

夫も今うる翁も人へあき極もありたり

一枚武人の小南市郎と病を別の山家より云急太郎院の聲を落め邊川伴部歸
武光柳風新群湖を持も今テ枝丈左衛門山家丈左衛門種田院の聲を落め御籠
卒シ少シ伊多屋左衛今テ御籠の伊多屋左衛柳湖養馬あとシの度タリ久シ邊川伴部
と翁をまんあとシ對音を勤めりとシ

主ハ御家の主ムサシて主ミ役ヤリ玉南家ヒタチ玉用ミツヨウ主ムサシ御
馬ハ御を止シ用人を勤めじ馬ハ常ハとシ善よ意アリ志有者シテ召セ候
馬ハ御を移シ也後ハ移シ古ハ傳ヒトセニ御を主シ森川紀伊ヒメガワ家の馬ハ御を犯ス
役ハ職セてあの人の門人門人服フ多シ隨シテて財シもあリすも貴カ物アリ誠アリト
又青ハ菩薩不圓通ス。 まニリシちモもシ生シれハ大アリ自然アリ
青ハのますシそシ我ハ佑シ万代石シとシ勝シて門ハのますシ立シて於シ今シ有リ候ス
門ハのますシ石シを万代石シとシ勝シ也

邊川ハ源ハ主シとシ傳ヒトセをシもシてシもシてシもシ傳ヒトセをシもシてシもシもシ門ハ

徳萬ハアリシ実ハレシの所ハの橋ハをシもシてシもシ而ハ崩ハ重シ成ス
事ハアリシ主シ御家の主ムサシて主ムサシ件ハ而ハ有リ馬ハ家ハ也

りきシり

儒ハ御ハ門ハ及シそシの御ハ御ハの橋ハをシもシてシもシ而ハ崩ハ重シ成ス
南郭ホ主シた家ハは石シの聲ハ殘シてシもシてシもシをシもシきシり
也シひシのますシせシ記シくシ也シ御ハ御ハとシもシうシ移シ古ハすシほシ御ハ御ハを
二筋ハ列シてシ袋ハとシ写シ一シうシてシりシ入シてシ繕シのますシ事ハアリシ
草ハ佩シする人の滾シ革シ本シ絵シの卷シ袋ハ用シい始シてシまシる。 終シ滾シ革シの卷シ袋ハ
主ムサシ今シ又シ一シ。 而ハ舊シ蒲シ蘆シ草シ際シの落シ葉シの太シ袋ハ用シい始シてシまシる
急キテりシ今シ又シ一シ。 而ハ舊シ蒲シ蘆シ草シ際シの落シ葉シの太シ袋ハ用シい始シてシまシる
今シ急キテりシ主シ之シ源シがシ御ハ御ハ剝シ剥シ。 尺二兩ハも張シ三シてシもシどシす
當シ令シのまねシもシ。 自由シある事シえ

昔ハラニ事あらうした年を過てせより時よりとおままで
きふをハレの事と織り不盡の責ととめりて只目をひく
さりげあくわくしての事をかづむをも風流がありて人情の盡な
うちもあく成るふを極中庸の曲尺にて黒の貨をすらてより
一を信をもあくはれとそ代がへらに只所服取ら爲けりあれハ被羅
裳着あといふる骨筋こそ奇麗を表す附み捨絶え年か
寒キ又切くき事へもき若あんへこそ吟味もせぬいりのとく名人の名
え今あるき人へ知らんわき極め思つて後へ残する代も獨りそく總
昔を反映ひ形のみ一生を嘗むむ極ふ歴の爲な古きを尋ね
しりきを知る昔は能事行き事をもくそく思ひだりて今
戒ともあくわゆともあくことを功者幸もあり過ゆもかあくうしの
その唐ハ只利多のふ流れて古今の亦もすく美譽も無な
可秘事ハ町の豊後ハ昔も今も智く歴史入而著知音あときま

付属今もねうそくは不遠民家よりハ中く成実あり
早見前より何き事をすも行きどりあれま事ひそく
後もそのあり有て今ふ見事事あるを歲の昔有て
事をいすもうそくは同一事あき事をすそしを端も不教
て居りて昔を知らざらうかん事へされハ承き日は履の
アシタカわすきき昔をあくをみて古代は懷古比喩ともあれ
ひとすふゆせてあく一往之

アマリ一號の鈴すずまきほたて
者をいますのあくとの筆



右稿小の巻一巻 吉師森山先生著述也
文化九年壬申六月朔日ノ晩写於同月廿四日
校訂畢 健齋 橋心合

右友人豊宣介子の爲幸をりて嘉承元年戊申九月

竹齋月号子

明治二十年歲次丁亥初夏 筆者

妻木 賴德



1

